

1983年九州地域の気象

（気象概況）

世界的にはエルニーニョ、エルチジョンの大噴火等異常現象が発生する中で、本邦の気象も夏期の「北冷西暑」気象現象にみられるように地域的にも季節的にも変化の大きい年であった。（第1表・第1図参照）

1. 平穏な年明けから冷え込みの正月

弱い冬型の気圧配置での年明けであったが、気温はやや高く暖かい正月となった。しかし、上旬末には冬型気圧配置も強まり、寒気も南下して寒さが厳しく、雪の降ったところも多かった。中旬は冬型気圧配置が緩んで、寒気の流入は弱く天気は愚図ついたが、南部は晴れの日が多かった。19日以降は冬型気圧配置になり、寒さも厳しく雨や雪が降り寒い日が続いた。23日には冬型気圧配置が緩み晴れた。このため、放射冷却による冷え込みが強く、熊本県下の各地で-3~-11℃の最低気温が記録された。このため、水道管が凍り破裂する被害がでた。下旬後半は移動性高気圧の東進もあって暖冬気味であった。

2. 寒暖変化と晴雨変化の2・3月

2月上旬は低気圧が発達しながら九州を通して東進し、寒冷前線の南下もあったが、全域的に雨が降ったり、雷を伴った強い雨が降った。このため、桜島では土石流が発生し被害がでた。その後は移動性高気圧の通過もあって、天気は穏やかに気温も高めに経過した。中旬初めと、中旬末から下旬にかけては、冬型気圧配置が強まり、暖冬傾向の気温は平年並となった。13日~14日にかけては冬型気圧配置が緩み、移動性高気圧となって通過したため、放射冷却による冷え込みが強く、最低気温の低下が大きかった佐賀県は、ビワの凍害の被害をうけた（被害額8,990万円）。18日~19日にかけて再び冬型気圧配置となり、寒気の移流もあって、各地で雪が降り積雪を観測したところも多く、山間部では30cm程の積雪となり、九州北部県の山間部を主体に交通機関に被害がでて、学校の休校もあった。下旬後半は高気圧に覆われ全域的に晴れて、福岡市では最小湿度（20%以下）を記録するなど、気温変化は大きく、月平均気温は全般に低かったが、南部では平年並であった。

3月初めに低気圧が発達し、九州北部を通して日本海に入り、荒れ模様の天気、「春一番」となり、北・西部を中心に大雨による山、がけ崩れ、家屋浸水被害がでた。その後一時冬型気圧配置によって、北・中部にみぞれ雪の降る天気の崩れがあった。中・下旬は一時冬型気圧配置が現われたが長続きせず、全般的には低気圧と移動性高気圧が交互に通加し、雨の日がやや多く、まとまった雨が降り、月末（30~1日）には奄美大島、徳之島、宮崎県に激しい雨が降り、家屋への浸水、道路損壊の被害がでた。したがって、月降水量は各地ともかなり多く、日照時間は逆に少なかった。

3. 雨害、ひょう害の4・5月

4月上旬は低気圧が短い周期で東進したため雨の日が多く、大気も不安定で荒れた。3月末からの発達した低気圧は、日向灘を北上したため宮崎県で風雨が強く、県中北部を中心に100~300mmの大雨が降り災害が発生した。一方九州北、中部では大気不安定による発達、強風、たつ巻や降ひょうがあり、ビニールハウスの倒壊や農作物の破棄、折損被害をえた。上旬末、中旬半ばに低気圧の通過、前線の南下によって大雨による水害が鹿児島県本土と離島で発生した。下旬は高気圧に覆われ晴天が多く、4月は全般に高温傾向で、平均気温は平年よりかなり高く、降水量は南部で月降水量の最大値を更新した。

5月上旬は低気圧の通過や前線の影響によって各地に雨が降り、長崎県で大雨による被害が発生した。中旬前半は晴れの日が続いたが、15、16日には低気圧が発達しながら九州北部を通り南岸沿いを東進した。このため北・中部を中心に70~80mmの雨が降り、100mm近い大雨の降った長崎市では水害が発生し、奄美地方は梅雨入りとなった。下旬は梅雨前線の活動も弱く、低気圧の発生もあって、曇りや雨の愚図ついた天気であった。月末（28~30日）に低気圧の通過によって、梅雨前線の活動が活発になり、種子島を中心に大雨が降り、大きな被害が発生した（被害額3億円）。

4. 大雨被害と梅雨明けの遅れた6・7月

6月上旬には高気圧がしばしば東進したために、梅雨前線は沖縄付近に停滞し、北上もみられて南部九州は2日に梅雨に入ったが、全般に梅雨前線の活動は弱く、南西諸島では一時強い雨が降ったが、大きな天気の崩れもみられず、旬降水量はかなり少なかった。中旬には低気圧が周期的に九州付近を通ったり、梅雨前線の北上もあって大雨が降り、12日（6日遅れ）に北部九州も梅雨に入った。19~21日には梅雨前線は九州南岸まで北上し、活動も活発になり、鹿児島県各地、長崎市、大分県北西部に大雨による被害が発生した。とくに加世田市では総雨量363mm、24時間降水量の最大値300mmを記録し、河川氾濫による大水害が発生して、総被害額131億円の大被害を与えた。この雨を「1981年6月19日から21日にかけての梅雨前線による鹿児島県（本土）の大雨」と気象庁は命名した。下旬は短い周期で低気圧が通過して梅雨前線の動きも小さく、旬降水量は南部、奄美地方で平年より多く、北・中部ではかなり少なかった。

7月上旬は南海上にあった梅雨前線は黄海の低気圧の東進に伴い、北上して活動が活発化し、北・中部に局地的な大雨が降って被害も発生した。上旬後半から中旬前半にかけてはオホーツク海高気圧が日本海に張りだし、梅雨前線は九州南岸まで後退し、中旬半ばには太平洋高気圧の影響もあって、梅雨前線は再び北上して、中部や北部で活動が

活発になり、14日～17日に200mmを越す大雨が降って水害が発生し、農業被害も水稲、施設などに及び被害額は福岡県14億、佐賀県71億の巨額に上った。さらに北上した梅雨前線は対馬から山陰地方に停滞して、長崎県を中心に大雨が降り、山陰地方には梅雨末期の記録的な豪雨災害をもたらした。北部九州も23日に平年より6日遅れの梅雨明けとなった。降水量は平均的には平年並となったが、旬、場所による差が大きかった。梅雨明け後は大平洋高気圧が強まり、夏型気圧配置の高温・多照の厳しい暑さとなった。

5. 猛暑と台風被害の8・9月

8月に入っても異常高温と干天の猛暑は続き、鹿児島市で36.7℃（累年2位）、熱帯夜が連続17日など気温の最高値が更新された。各地の高温の概況を第2表に示した。こ

第2表 異常高温期間の気象値

	福岡	飯塚	大分	日田	宮崎	都城	鹿児島
日平均気温	31.1	29.7	30.6	29.9	31.2	29.9	30.9
半年差℃	+3.1	+2.4	+3.6	+3.0	+3.9	+3.6	+3.0
異常気温	35.4	36.5	35.7	38.2	37.6	36.7	36.7
半年差℃	+3.3	+4.1	+4.1	+5.5	+6.2	+5.7	+1.3
期間平均気温	29.8	28.3	28.1	27.6	30.7	28.6	30.4
半年差℃	+2.0	+1.1	+1.4	+1.2	+3.4	+2.3	+2.5
総降水量mm	33.0	112.0	110.5	121.0	—	—	—
無降水継続 日数日	12	6	17	6	—	—	—
期 間	7月20日 8月15日	7月20日 8月15日	7月21日 8月31日	7月21日 8月31日	7月21日 8月4日	7月21日 8月4日	8月3日 8月5日

の異常高温のためニワトリの熱射病死（66300羽、宮崎）、農作物の炎暑被害が発生した。中旬には台風5号の北上接近により、夏型気圧配置は崩れ、低気圧や熱帯低気圧のじょう乱が通過するようになり、天気は変わりやすくなって愚図ついたが、気温は高めに経過した。

9月初め、九州は大平洋高気圧の周辺部に覆われ、南の湿った空気を呼び、大気が不安定で晴れや雨が降る変わりやすい天気が続き、雷雨やたつ巻によって風害や水害が発生した。9日～10日には低気圧の東進と前線の影響で雷を伴った強雨が降り、薩摩半島に水害が発生した。中旬は移動性高気圧と低気圧が交互に東進するようになり、天気は変わりやすく、秋を告げる気圧配置となった。25日には台風10号が沖縄近海に達し、秋雨前線もかかわって雨が降り、台風の北上で風雨が強まり、第2図に示すコースをとって、27日には九州西海上から方向を東にとり、長崎市附近に上陸して九州を横断し、四国方面にめけた。このため、台風

の進路にあたった地方を中心に全域で、水稲、野菜類等風水害被害をうけた。その被害額は50億にも達した。月平均気温は全般に平年より高く、とくに最低気温は高かった。

6. 高気圧に覆われた10月と異常少雨の11月

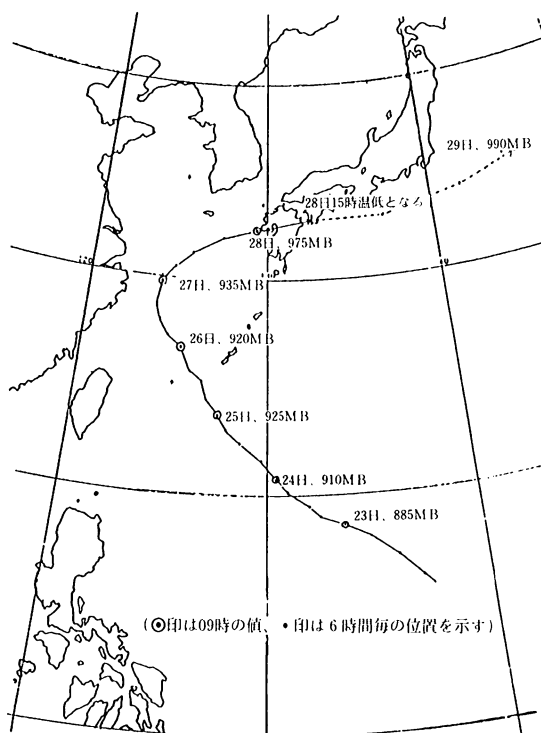
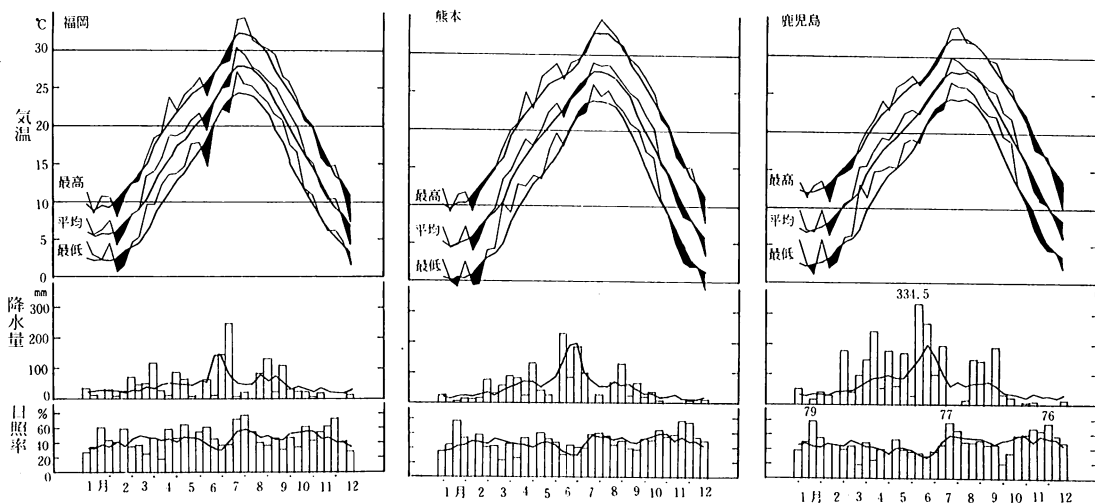
10月上旬は移動性高気圧と低気圧が九州付近を交互に東進した。このため天気は短い周期で変化した。月末の台風13号は沖縄の東海上を北上したが、進路を変えたため、九州への影響はなく、上陸台風は1個であった。中旬は高気圧に覆われて、全般的に晴れの日が多く旬平均気温も、最低気温も平年より高く、日照時間は少なかった。下旬に入って前線が九州南岸に停滞したり、低気圧が通過して曇りや小雨もあったが、弱い冬型気圧配置や大陸からの移動性高気圧に覆われる穏やかな日が多く、朝夕の冷え込みも強く、高温化傾向であった気温も平年並に戻り日照時間は多かった。

11月は大陸の優勢な高気圧に覆われ、低気圧や前線の影響も少なく、比較的穏やかで中旬の平均気温は平年並、南部では低かった。降水量はかなり少なく、日照時間も少なかった。中旬は低気圧が東進した後、冬型の気圧配置が現われ、17日には寒冷前線が南下して、真冬並の寒気が流れ込み、寒さも厳しく、各地で初霜、初氷などが観測され、福岡市では平年より27日早く初霜を観測した。その後一時冬型気圧配置の緩みがあったが、24日から27日にかけて再び冬型気圧配置となり、上空に強い寒気が流れ込んだため、晴れたり曇ったりの寒い日が続き、月平均気温は低いところが多く、月降水量はかなり少なく、平年の7～38%で冬作物の生育に影響した。

7. 厳しい寒冬の12月

12月に入っても移動性高気圧に覆われて晴天が続き、冬型気圧配置による低温傾向は続き、天気の崩れも小さく、日照時間は多く、降水量の極めて少ない、11月からの少雨傾向が続いた。中旬は一時冬型気圧配置となって、北・中部でみぞれやあられが降り荒れたが、移動性高気圧が南部から東進し、気温は高めに経過した。17日は本格的な冬型気圧配置となり、厳しい寒さが加わり晴れて乾燥した。下旬は22日に低気圧が九州南部を通り、まとまった雨が降った。九州本土では10mm前後で、低気圧の通過後は大陸からの高気圧と上空-30℃の寒気が九州まで南下し、強い冬型の気圧配置となり月末まで居座ったため、各地で最低気温、積雪が更新された。この寒冬入りは施設園芸農家にとっては、燃費増の招来が気がかりとなる。

（九州農業試験場環境第一部農業気象研究室）



第2図 台風第10号の経路図（昭和58年9月23日～28日）